



教育大生と看護系学生の福祉に関する意識調査（第1報）：福祉に関する理解と教育について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2016-03-30 キーワード: 作成者: 芝木, 美沙子, 石井, 柚季, 原谷, 珠美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00006407

教育大生と看護系学生の福祉に関する意識調査（第1報）

— 福祉に関する理解と教育について —

芝木美沙子・石井 柚季・原谷 珠美*

北海道教育大学旭川校 家庭看護学研究室

*日本医療大学 保健医療学部 看護学科

The Survey on Consciousness of Welfare by Teachers College Students and Nursing Students I

— Understanding and Education about Welfare —

SHIBAKI Misako, ISHII Yuki and HARAYA Tamami*

Department of Home Nursing, Asahikawa Campus, Hokkaido University of Education

*Japan Health Care College

概 要

我々は、少子高齢化の問題や共生社会の実現に向けたノーマライゼーションの考え方の普及等により、「福祉」に関する問題を意識しやすい状況にある。そこで、次世代の教育を担う教育大生と、医療福祉に携わる看護系学生の福祉に関する理解と教育についての考え方を知る事で、今後の課題を明らかにしようとするものである。教育大生300名と看護系学生211名を対象に2014年10月～11月に質問紙調査を実施した。回収数は421名であり、回収率は82.4%であった。

福祉問題への関心について、「大いにある」が14.3%、「少しある」が62.5%であり、福祉問題に関心を持っている者は多かったが、高くなっているとは言えない。福祉や障害に関する語句の理解度は、受けている教育によって違いがあり、看護系学生は医療に関する語句の理解度が高く、教育大生は教育に関する語句の理解度が高かった。また、性別による違いも認められた。福祉教育を始めるのに適する発達段階は性別などの隔たりなく遊ぶ『幼稚園から小学校中学年まで』が64.6%と多く、ノーマライゼーションの精神を育てていくためには早い段階からの指導が必要と考えられている。知識を得るのは「学校の授業」が多いので、種々の教科で福祉に関する教育を行うとともに、学校内だけでなく、様々な機会を積極的に作る事が望まれる。

I. はじめに

近年、ほぼ毎日のように福祉に関連した報道がなされるようになり、我々は「福祉」に関する問題を比較的意識しやすい状況にある。

この背景として、第一に、少子高齢化の問題があげられる。2014年5月の人口推計¹⁾をみると、0～14歳の人口は前年同月に比べ16万6千人減少しているのに対し、65歳以上の人口は108万人以上も増加しており、加えて85歳以上の人口比率が高まっている。今後もこの傾向が推移していくと予想されている。

この少子化と超高齢社会によって、様々な社会保障制度に関する財源確保が困難になるなどの問題が生じており、わが国の今後の社会福祉のあり方は喫緊の課題となっている。

第二に、障害者福祉に関する考え方において、すべての国民が障害の有無によって分け隔てられることなく、共生する社会の実現にむけて障害者の自立および社会参加の支援などが推進されてきていることである。その取り組みとして障害者基本法の改正、障害者総合支援法の制定など、ノーマライゼーションの考え方が普及し、関連した法整備の充実が図られてきている。

教育界でもこのような考えに基づくインクルーシブ教育の推進がより求められ、特殊教育と呼ばれていたものが特別支援教育と呼称を変え、通常学級にいる「困り感」をもった子どもについても適切な支援を行っていこうという動きが活発になっている²⁾³⁾。

昭和52年に行われた野々山⁴⁾の大学生を対象とした福祉に関する意識調査では、大学生は福祉への関心は高いものの、行動化に結びつかないことが報告されているが、現在、その頃に比較して社会環境は大きく変化している。

そこで、本研究では、将来の次世代教育を担う教員養成課程の大学生、および高齢者を含む障害者などの医療福祉に携わる看護系の学生を対象として、障害者等の福祉に関する意識や知識、大学生活・日常生活における福祉配慮行動や経験な

どの実態を明らかにすることを目的としている。そして、教員養成課程の大学生の現在の意識から課題点を明らかにするとともに、今後どのような改善が求められるのかを検討するものである。

II. 研究対象および方法

2014年10月～11月、北海道内の教育大生300名及び看護系学生211名の計511名を対象とした。

調査は無記名自己記入式で、結果は統計的に処理されるので、個人が特定されないこと、回答したくない質問には答えなくてもよいことを明記した。

主な調査内容は、福祉への関心、福祉・障害に関する語句の理解、これまでの経験、障害者へのイメージ、障害者等に体する行動、福祉教育等についてである。

調査結果の解析は χ^2 検定（5以下のセルがあるときはYatesの補正値を用いた）を行い、有意水準5%をもって差があるとした。なお、集計及び統計解析にはMicrosoft excel及びExcelアンケート太閤Ver.5を使用した。

III. 結果

1. 調査対象について

回収数は421部であり、回収率は82.4%であった。教育大生が223名（男子113名、女子104名）、看護系学生が198名（男子17名、女子179名）であった。

また、学年別にみると、1年生124名（男子37名、女子85名）、2年生114名（男子36名、女子76名）、3年生106名（男子33名、女子70名）、4年生77名（男子24名、女子52名）であった。

教育大生の専攻を免許種別にみると、小学校27名、国語31名、社会科57名、理科22名、家庭23名、技術16名、音楽19名、美術19名、体育9名であった。

2. 福祉への関心等について

1) 福祉への関心

近年福祉に関する問題が騒がれているが、そういった福祉問題に関心はあるか聞いたところ、「大いにある」14.3%（60名）、「少しある」62.5%（263名）、「あまりない」16.6%（70名）、「全くない」4.5%（19名）であった。また、「大いにある」「少しある」を『関心のある方』としたところ76.7%（323名）、「あまりない」「全くない」を『関心のない方』としたところ21.1%（89名）であった。

学校別でみると、『関心のある方』は、教育大生74.4%（166名）に対し、看護系学生は79.3%（157名）で有意差はなかった。

性別でみると、『関心のある方』は男子66.2%（86名）に対し、女子82.0%（232名）と、女子の方が有意に多かった（ $p < 0.001$ ）。また、教育大生のみでみても、女子の方が有意に多かった（ $p < 0.01$ ）。

学年別にみると、『関心のある方』は、1年生83.1%（103名）、2年生72.8%（83名）、3年生74.5%（79名）、4年生75.3%（58名）であった。これをさらに1・2年生と3・4年生とで比較したが、有意差はなかった（以下、学年別の比較は、1・2年生と3・4年生で比較した）。

2) 教育の重要性

福祉問題を解決するうえで、教育は重要な役割を果たすと思うか聞いたところ、「重要だと思う」93.3%（393名）、「重要だと思わない」2.9%（12名）であった。

福祉への関心別にみると、「重要だと思う」は『関心がある方』95.0%（307名）、『関心がない方』91.0%（81名）で有意差はなかった。

学校別・性別・学年別にみたが、有意差はなかった。

3. 福祉・障害に関する語句の理解について

福祉・障害に関する語句の理解については、「理解している（説明できる）」（以下「説明できる」と略す）、「聞いたことがありなんとなくイメージ

できる」「聞いたことはあるが具体的にイメージできない」「見たことも聞いたこともない」の4つから選んでもらった。また、「聞いたことがありなんとなくイメージできる」「聞いたことはあるが具体的にイメージできない」「見たことも聞いたこともない」を合わせて『説明できない』とした。有意差は、「説明できる」と『説明できない』でみた。

1) 福祉に関する語句の理解について（表1）

(1) バリアフリー

「バリアフリー」は、「説明できる」73.2%（308名）、「聞いたことがありなんとなくイメージできる」26.1%（110名）、「聞いたことはあるが具体的にイメージできない」0.7%（3名）で、「見たことも聞いたこともない」はなく、『説明できない』は26.8%（113名）であった。

学校別・性別・学年別・福祉への関心別・福祉教育を重要視しているかでみたが、有意差はなかった。

(2) ユニバーサルデザイン

「ユニバーサルデザイン」は、「説明できる」67.0%（282名）、「聞いたことがありなんとなくイメージできる」30.2%（127名）、「聞いたことはあるが具体的にイメージできない」2.9%（12名）、「見たことも聞いたこともない」はなく、『説明できない』は33.0%（139名）であった。

学校別・性別・学年別・福祉への関心別・福祉教育を重要視しているかでみたが、有意差はなかった。

(3) ノーマライゼーション

「ノーマライゼーション」は、「説明できる」28.3%（119名）、「聞いたことがありなんとなくイメージできる」40.6%（171名）、「聞いたことはあるが具体的にイメージできない」28.3%（119名）、「見たことも聞いたこともない」2.9%（12名）であり、『説明できない』は71.7%（302名）であった。

表1 福祉に関する語句の理解

名(%)

語句	理解度	全体 n=421	学校別			性別			学年別		
			教育大生 n=223	看護学生 n=198	検定	男 n=130	女 n=283	検定	1・2年生 n=238	3・4年生 n=183	検定
バリアフリー	説明できる	308 (73.2)	157 (70.4)	151 (76.3)	n. s	88 (67.7)	214 (75.6)	n. s	166 (69.7)	142 (77.6)	n. s
	説明できない	113 (26.8)	66 (29.6)	47 (23.7)		42 (32.3)	69 (24.4)		72 (30.3)	41 (22.4)	
ユニバーサルデザイン	説明できる	282 (67.0)	156 (70.0)	126 (63.6)	n. s	89 (68.5)	189 (66.8)	n. s	157 (66.0)	125 (68.3)	n. s
	説明できない	139 (33.0)	67 (30.0)	72 (36.4)		41 (31.5)	94 (33.2)		81 (34.0)	58 (31.7)	
ノーマライゼーション	説明できる	119 (28.3)	60 (26.9)	59 (29.8)	n. s	37 (28.5)	78 (27.6)	n. s	57 (23.9)	62 (33.9)	*
	説明できない	302 (71.7)	163 (73.1)	139 (70.2)		93 (71.5)	205 (72.4)		181 (76.1)	121 (66.1)	
インクルーシブ教育	説明できる	54 (12.8)	49 (22.0)	5 (2.5)	***	23 (17.7)	30 (10.6)	*	25 (10.5)	29 (15.8)	n. s
	説明できない	367 (87.2)	174 (78.0)	193 (97.5)		107 (82.3)	253 (89.4)		213 (89.5)	154 (84.2)	
ジェンダー	説明できる	210 (49.9)	143 (64.1)	67 (33.8)	***	77 (59.2)	128 (45.2)	**	126 (52.9)	84 (45.9)	n. s
	説明できない	211 (50.1)	80 (35.9)	131 (66.2)		53 (40.8)	155 (54.8)		112 (47.1)	99 (54.1)	

(χ^2 検定 *** $p<0.001$, ** $p<0.01$, * $p<0.05$, n. s非有意)

学年別にみると、「説明できる」は、1・2年生23.9% (57名) に対し、3・4年生33.9% (62名) と、3・4年生の方が有意に多かった ($p<0.05$)。

学校別・性別・福祉への関心別・福祉教育を重要視しているかで見ても、有意差はなかった。

(4) インクルーシブ教育

「インクルーシブ教育」は、「説明できる」12.8% (54名)、「聞いたことがありなんとなくイメージできる」17.6% (74名)、「聞いたことはあるが具体的にイメージできない」26.6% (112名)、「見たことも聞いたこともない」43.0% (181名)であり、『説明できない』87.2% (367名)であった。

学校別で見ると、「説明できる」は、教育大生22.0% (49名) に対し、看護系学生2.5% (5名) と、「説明できる」は教育大生の方が有意に多かった ($p<0.001$)。

性別で見ると、「説明できる」は、男子17.7% (23名) に対し、女子10.6% (30名) と、男性の方が有意に多かった ($p<0.05$) が、教育大生のみで見ると有意差はなかった。

学年別・福祉への関心別・福祉教育を重要視し

ているかで見ても、有意差はなかった。

(5) ジェンダー

「ジェンダー」は、「説明できる」49.9% (210名)、「聞いたことがありなんとなくイメージできる」37.1% (156名)、「聞いたことはあるが具体的にイメージできない」10.0% (42名)、「見たことも聞いたこともない」3.1% (13名)であり、『説明できない』は50.1% (211名)であった。

学校別で見ると、「説明できる」は、教育大生64.1% (143名) に対し、看護系学生33.8% (67名) と、教育大生の方が有意に多かった ($p<0.001$)。

性別で見ると、「説明できる」は、男子59.2% (77名) に対し、女子45.2% (128名) と、男性の方が有意に多かった ($p<0.01$) が、教育大生のみで見ると有意差はなかった。

学年別・福祉への関心別・福祉教育を重要視しているかで見ても、有意差はなかった。

2) 障害に関する語句の理解について (表2)

(1) ダウン症

「ダウン症」は、「説明できる」39.4% (166名)、「聞いたことがありなんとなくイメージできる」

表2 障害に関する語句の理解

名 (%)

語句	理解度	全体 n=421	学校別			性別			学年別		
			教育大生 n=223	看護系学生 n=198	検定	男 n=130	女 n=283	検定	1・2年生 n=238	3・4年生 n=183	検定
ダウン症	説明できる	166 (39.4)	57 (25.6)	109 (55.1)	***	35 (26.9)	128 (45.2)	***	86 (36.1)	80 (43.7)	n. s
	説明できない	252 (59.9)	163 (73.1)	89 (44.9)		94 (72.3)	153 (54.1)		151 (63.4)	101 (55.2)	
自閉症	説明できる	163 (38.7)	77 (34.5)	86 (43.4)	n. s	41 (31.5)	118 (41.7)	*	81 (34.0)	82 (44.8)	*
	説明できない	255 (60.6)	143 (64.1)	112 (56.6)		88 (67.7)	163 (57.6)		156 (65.5)	99 (54.1)	
発達障害	説明できる	195 (46.3)	90 (40.4)	105 (53.0)	*	49 (37.7)	142 (50.2)	*	99 (41.6)	96 (52.5)	*
	説明できない	222 (52.7)	130 (58.3)	92 (46.5)		80 (61.5)	138 (48.8)		137 (57.6)	85 (46.4)	
肢体不自由	説明できる	199 (47.3)	108 (48.4)	91 (46.0)	n. s	54 (41.5)	141 (49.8)	n. s	88 (37.0)	111 (60.7)	***
	説明できない	219 (52.0)	112 (50.2)	107 (54.0)		75 (57.7)	140 (49.5)		149 (62.6)	70 (38.3)	
視覚障害	説明できる	235 (55.8)	122 (54.7)	113 (57.1)	n. s	62 (47.7)	168 (59.4)	*	119 (50.0)	116 (63.4)	**
	説明できない	182 (43.2)	97 (43.5)	85 (42.9)		66 (50.8)	113 (39.9)		117 (49.2)	65 (35.5)	
視覚障害	説明できる	234 (55.6)	120 (53.8)	114 (57.6)	n. s	61 (46.9)	168 (59.4)	*	119 (50.0)	115 (62.8)	**
	説明できない	183 (43.5)	100 (44.8)	83 (41.9)		68 (52.3)	112 (39.6)		117 (49.2)	66 (36.1)	
精神障害	説明できる	188 (44.7)	74 (33.2)	114 (57.6)	***	42 (32.3)	143 (50.5)	***	90 (37.8)	98 (53.6)	***
	説明できない	230 (54.6)	146 (65.5)	84 (42.4)		87 (66.9)	138 (48.8)		147 (61.8)	83 (45.4)	
知的障害	説明できる	186 (44.2)	90 (40.4)	96 (48.5)	n. s	47 (36.2)	135 (47.7)	*	92 (38.7)	94 (51.4)	**
	説明できない	232 (55.1)	130 (58.3)	102 (51.5)		82 (63.1)	146 (51.6)		145 (60.9)	87 (47.5)	
特別支援教育	説明できる	159 (37.8)	103 (46.2)	56 (28.3)	***	52 (40.0)	102 (36.0)	n. s	81 (34.0)	78 (42.6)	n. s
	説明できない	259 (61.5)	117 (52.5)	142 (71.7)		77 (59.2)	179 (63.3)		156 (65.5)	103 (56.3)	

(χ^2 検定 ***p<0.001, **p<0.01, *p<0.05, n. s非有意)

54.2% (228名), 「聞いたことはあるが具体的にイメージできない」5.0% (21名), 「見たことも聞いたこともない」0.7% (3名)であり、『説明できない』59.9% (252名)であった。

学校別でみると、「説明できる」は、教育大生25.6% (57名)に対し、看護系学生55.1% (109名)と、看護系学生の方が有意に多かった(p<0.001)。

性別でみると、「説明できる」は、男子26.9% (35名)に対し、女子45.2% (128名)と、女性の方が有意に多かった(p<0.001)が、教育大生のみでみると有意差はなかった。

学年別・福祉への関心別・福祉教育を重要視しているかで見ても、有意差はなかった。

(2) 自閉症

「自閉症」は、「説明できる」38.7% (163名), 「聞いたことがありなんとなくイメージできる」55.3% (233名), 「聞いたことはあるが具体的にイメージできない」4.8% (20名), 「見たことも聞いたこともない」0.5% (2名)であり、『説明できない』60.6% (255名)であった。

性別でみると、「説明できる」は、男子31.5% (41名)に対し、女子41.7% (118名)と、女子の方が有意に多かった(p<0.05)が、教育大生のみでみると有意差はなかった。

学年別にみると、「説明できる」は、1・2年生では34.0% (81名)に対し、3・4年生では44.8% (82名)と、3・4年生の方が有意に多かった(p<0.05)。

学校別・福祉への関心別・福祉教育を重要視しているかで見ても、有意差はなかった。

(3) 発達障害

「発達障害」は、「説明できる」46.3% (195名), 「聞いたことがありなんとなくイメージできる」48.5% (204名), 「聞いたことはあるが具体的にイメージできない」3.6% (15名), 「見たことも聞いたこともない」0.7% (3名)であり、『説明できない』52.7% (222名)であった。

学校別で見ると、「説明できる」は、教育大生40.4% (90名)に対し、看護系学生53.0% (105名)と、看護系学生の方が有意に多かった ($p<0.01$)。

性別で見ると、「説明できる」は、男子37.7% (49名)に対し、女子50.2% (142名)と、女子の方が有意に多かった ($p<0.05$)が、教育大生のみで見ると有意差はなかった。

学年別で見ると、「説明できる」は、1・2年生では41.6% (99名)に対し、3・4年生では52.5% (96名)と、3・4年生の方が有意に多かった ($p<0.05$)。

福祉への関心別・福祉教育を重要視しているかで見ても、有意差はなかった。

(4) 肢体不自由

「肢体不自由」は、「説明できる」47.3% (199名), 「聞いたことがありなんとなくイメージできる」43.9% (185名), 「聞いたことはあるが具体的にイメージできない」6.2% (26名), 「見たことも聞いたこともない」1.9% (8名)であり、『説明できない』52.0% (219名)であった。

学年別で見ると、「説明できる」は、1・2年生では37.0% (88名)に対し、3・4年生では60.7% (111名)と、3・4年生の方が有意に多かった ($p<0.001$)。

学校別・性別・福祉への関心別・福祉教育を重要視しているかで見ても、有意差はなかった。

(5) 視覚障害

「視覚障害」は、「説明できる」55.8% (235名),

「聞いたことがありなんとなくイメージできる」41.3% (174名), 「聞いたことはあるが具体的にイメージできない」1.4% (6名), 「見たことも聞いたこともない」0.5% (2名)であり、『説明できない』43.2% (182名)であった。

性別で見ると、「説明できる」は、男子47.7% (62名)に対し、女子59.4% (168名)と、女子の方が有意に多かった ($p<0.05$)。また、教育大生のみで見ても、女子の方が有意に多かった ($p<0.01$)。

学年別で見ると、「説明できる」は、1・2年生では50.0% (119名)に対し、3・4年生では63.4% (116名)と、3・4年生の方が有意に多かった ($p<0.01$)。

学校別・福祉への関心別・福祉教育を重要視しているかで見ても、有意差はなかった。

(6) 聴覚障害

「聴覚障害」は、「説明できる」55.6% (234名), 「聞いたことがありなんとなくイメージできる」41.6% (175名), 「聞いたことはあるが具体的にイメージできない」1.2% (5名), 「見たことも聞いたこともない」0.7% (3名)であり、『説明できない』43.5% (183名)であった。

性別で見ると、「説明できる」は、男子46.9% (61名)に対し、女子59.4% (168名)と、女子の方が有意に多かった ($p<0.05$)。また、教育大生のみで見ても、女子の方が有意に多かった ($p<0.05$)。

学年別で見ると、「説明できる」は、1・2年生では50.0% (119名)に対し、3・4年生62.8% (115名)と、3・4年生の方が有意に多かった ($p<0.01$)。

学校別・福祉への関心別・福祉教育を重要視しているかで見ても、有意差はなかった。

(7) 精神障害

「精神障害」は、「説明できる」44.7% (188名), 「聞いたことがありなんとなくイメージできる」46.8% (197名), 「聞いたことはあるが具体的にイメージできない」7.1% (30名), 「見たことも聞いたこともない」0.7% (3名)であり、『説明できない』54.6% (230名)であった。

学校別でみると、「説明できる」は、教育大生33.2%（74名）に対し、看護系学生57.6%（114名）と、看護系学生の方が有意に多かった（ $p<0.001$ ）。

性別でみると、「説明できる」は、男子32.3%（42名）に対し、女子50.5%（143名）と、女子の方が有意に多かった（ $p<0.001$ ）が、教育大生のみでみると有意差はなかった。

学年別にみると、「説明できる」は、1・2年生では37.8%（90名）に対し、3・4年生では53.6%（98名）と、3・4年生の方が有意に多かった。（ $p<0.001$ ）。

学校別・福祉への関心別・福祉教育を重要視しているかで見ても、有意差はなかった。

(8) 知的障害

「知的障害」は、「説明できる」44.2%（186名）、「聞いたことがありなんとなくイメージできる」49.4%（208名）、「聞いたことはあるが具体的にイメージできない」5.2%（22名）、「見たことも聞いたこともない」0.5%（2名）であり、『説明できない』55.1%（232名）であった。

性別でみると、「説明できる」は、男子36.2%（47名）に対し、女子47.7%（135名）と、女性の方が有意に多かった（ $p<0.05$ ）。また、教育大生の

みでみても、女子の方が有意に多かった（ $p<0.05$ ）。

学年別にみると、「説明できる」は、1・2年生では38.7%（92名）に対し、3・4年生では51.4%（94名）と、3・4年生の方が有意に多かった（ $p<0.01$ ）。

学校別・福祉への関心別・福祉教育を重要視しているかで見ても、有意差はなかった。

(9) 特別支援教育

「特別支援教育」は、「説明できる」37.8%（159名）、「聞いたことがありなんとなくイメージできる」49.4%（208名）、「聞いたことはあるが具体的にイメージできない」8.8%（37名）、「見たことも聞いたこともない」3.3%（14名）であり、『説明できない』61.5%（259名）であった。

学校別でみると、「説明できる」は、教育大生46.2%（103名）に対し、看護系学生28.3%（56名）と、教育大生の方が有意に多かった（ $p<0.001$ ）。

性別・学年別・福祉への関心別・福祉教育を重要視しているかで見ても、有意差はなかった。

3) 障害に関する語句を知った経緯・媒体(表3)

障害に関する語句の理解について、「説明できる」「聞いたことがありなんとなくイメージでき

表3 障害に関する語句を知った経緯・媒体

経緯・媒体	全体 n=3708	障害に関する語句								
		ダウン症 n=415	自閉症 n=416	発達障害 n=402	肢体不自由 n=410	視覚障害 n=415	聴覚障害 n=415	精神障害 n=415	知的障害 n=416	特別支援教育 n=404
学校の授業	2531 (68.3)	264 (63.6)	263 (63.2)	291 (72.4)	261 (63.7)	288 (69.4)	286 (68.9)	289 (69.6)	298 (71.6)	291 (72.0)
テレビ	1880 (50.7)	262 (63.1)	250 (60.1)	206 (51.2)	206 (50.2)	198 (47.7)	199 (48.0)	199 (48.0)	204 (49.0)	156 (38.6)
インターネット	574 (15.5)	72 (17.3)	75 (18.0)	72 (17.9)	58 (14.1)	64 (15.4)	57 (13.7)	66 (15.9)	63 (15.1)	47 (11.6)
書籍・雑誌	551 (14.9)	68 (16.4)	68 (16.3)	70 (17.4)	78 (19.0)	54 (13.0)	53 (12.8)	58 (14.0)	56 (13.5)	46 (11.4)
身近にいる人	431 (11.6)	75 (18.1)	67 (16.1)	53 (13.2)	30 (7.3)	38 (9.2)	31 (7.5)	38 (9.2)	46 (11.1)	53 (13.1)
家族	167 (4.5)	28 (6.7)	27 (6.5)	19 (4.7)	17 (4.1)	12 (2.9)	11 (2.7)	17 (4.1)	17 (4.1)	19 (4.7)
課外活動	156 (4.2)	11 (2.7)	10 (2.4)	14 (3.5)	29 (7.1)	19 (4.6)	15 (3.6)	16 (3.9)	14 (3.4)	28 (6.9)
まんが	105 (2.8)	10 (2.4)	25 (6.0)	12 (3.0)	9 (2.2)	13 (3.1)	11 (2.7)	8 (1.9)	13 (3.1)	4 (1.0)
絵本	8 (0.2)	3 (0.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (0.5)	2 (0.5)	1 (0.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
その他	115 (3.1)	14 (3.4)	17 (4.1)	13 (3.2)	9 (2.2)	9 (2.2)	10 (2.4)	13 (3.1)	13 (3.1)	17 (4.2)

名(%)

る」「聞いたことはあるが具体的にイメージできない」のいずれかであると答えた者に、その言葉を知った（聞いた）経緯・媒体はどのようなものであったか複数回答可として聞いた。

どの語句も「学校の授業」が最も多く、63.2～72.4%であり、次いで「テレビ」38.6～63.1%であった。その次に多かったのは、「インターネット」「書籍・雑誌」「身近にいる人」の3つであり、順番が違う語句もあるが、多くが10%台であった。

それぞれの語句について、学校別・性別・学年別・福祉への関心別・福祉教育を重要視しているかで有意差をみた。以下は、有意差があったものについてのみ取り上げた。

(1) ダウン症

学校別でみると、看護系学生では「学校の授業」($p < 0.01$)が有意に多かった。

性別でみると、女子では「学校の授業」($p < 0.001$)、「テレビ」($p < 0.01$)が有意に多かった。教育大生のみでみると、「テレビ」($p < 0.05$)は女子が有意に多かったが、「学校の授業」は有意差がなかった。

学年別でみると、3・4年生では「学校の授業」($p < 0.001$)、「書籍・雑誌」($p < 0.05$)が有意に多かった。

福祉への関心別にみると、「テレビ」($p < 0.05$)、「書籍・雑誌」($p < 0.05$)の項目において『関心のある方』が多かった。

(2) 自閉症

性別でみると、女子では「学校の授業」($p < 0.01$)、「テレビ」($p < 0.05$)、「まんが」($p < 0.05$)が有意に多かった。教育大生のみでみると、「学校の授業」($p < 0.01$)、「まんが」($p < 0.01$)は女子が有意に多かったが、「テレビ」は有意差がなかった。

学年別でみると、3・4年生では「学校の授業」($p < 0.001$)が有意に多かった。

福祉への関心別にみると、『関心のある方』では「テレビ」が有意に多かった ($p < 0.05$)。

福祉教育を重要視しているかで見ると、「テレビ」($p < 0.05$)が福祉教育を重要とする者の方が有意に多かった。

(3) 発達障害

学校別でみると、教育大生では、「身近にいる人」($p < 0.05$)が有意に多かった。

性別でみると、女子では「学校の授業」($p < 0.001$)が有意に多かった。教育大生のみでみても、「学校の授業」($p < 0.01$)が有意に多かった。

学年別でみると、3・4年生では「学校の授業」($p < 0.001$)が有意に多かった。

(4) 肢体不自由

性別でみると、女子では「学校の授業」($p < 0.05$)が有意に多かった。教育大生のみでみても、「学校の授業」($p < 0.05$)が有意に多かった。

学年別でみると、1・2年生では「テレビ」($p < 0.05$)が有意に多く、3・4年生では「学校の授業」($p < 0.001$)、「課外活動」($p < 0.001$)が有意に多かった。

福祉教育を重要視しているかで見ると、「テレビ」($p < 0.05$)が福祉教育を重要とする者の方が有意に多かった。

(5) 視覚障害

性別でみると、女子では「学校の授業」($p < 0.001$)が有意に多かった。教育大生のみでみても、「学校の授業」($p < 0.01$)が有意に多かった。

学年別にみると、1・2年生では「テレビ」($p < 0.001$)が有意に多く、3・4年生では「学校の授業」($p < 0.001$)が有意に多かった。

(6) 聴覚障害

性別でみると、女子では「学校の授業」($p < 0.01$)が有意に多かった。教育大生のみでみても、「学校の授業」($p < 0.01$)が有意に多かった。

学年別にみると、1・2年生では「テレビ」($p < 0.001$)が有意に多く、3・4年生では「学校の授業」($p < 0.001$)、「課外活動」($p < 0.05$)が有意

に多かった。

(7) 精神障害

学校別でみると、看護系学生では「学校の授業」が有意に多かった ($p < 0.01$)。

性別でみると、女子では「学校の授業」 ($p < 0.001$) が有意に多かった。教育大生のみでみても、「学校の授業」 ($p < 0.01$) が有意に多かった。

学年別にみると、1・2年生では「テレビ」 ($p < 0.001$) が有意に多く、3・4年生では「学校の授業」 ($p < 0.001$) が有意に多かった。

(8) 知的障害

性別でみると、女子では「学校の授業」 ($p < 0.001$) が有意に多かった。教育大生のみでみても、「学校の授業」 ($p < 0.001$) が有意に多かった。

学年別にみると、1・2年生では「テレビ」 ($p < 0.05$) が有意に多く、3・4年生では「学校の授業」 ($p < 0.001$) が有意に多かった。

(9) 特別支援教育

学校別でみると、教育大生では「学校の授業」 ($p < 0.001$) が有意に多かった。

性別でみると、女子では「身近にいる人」 ($p < 0.05$) が有意に多かった。また、教育大生のみでみると、「学校の授業」 ($p < 0.01$)、「家族」 ($p < 0.05$)、「身近にいる人」 ($p < 0.01$) が、女子の方が有意に多かった。

学年別にみると、1・2年生では「テレビ」 ($p < 0.01$) が有意に多く、3・4年生では「学校の授業」 ($p < 0.001$)、「課外活動」 ($p < 0.05$) が有意に多かった。

福祉への関心別でみると、関心のある者では「テレビ」 ($p < 0.001$) が有意に多かった。

4. 福祉に関する教育について

1) 学校での授業や講義等

障害者を理解するための学習や交流を行う授業や講義等を受けたり、課外活動を行ったりした経験はあるか聞いたところ、「ある」71.3% (300

名)、「ない」28.0% (118名)であった。

学校別でみると、「ある」は、教育大生73.5% (164名)に対し、看護系学生68.7% (136名)と、有意差はなかった。

学年別にみると、「ある」は、1年生65.3% (81名)、2年生69.3% (79名)、3年生76.4% (81名)、4年生76.6% (59名)であった。また、1・2年生67.2% (160名)に対し、3・4年生76.5% (140名)と、3・4年生の方が有意に多かった ($p < 0.05$)。

福祉への関心別にみると、「ある」は、『関心がある方』74.9% (242名)に対し、『関心のない方』62.9% (56名)と、『関心のある方』が有意に多かった ($p < 0.05$)。

性別、福祉教育を重要視しているかでみたが、有意差はなかった。

2) 経験した時期

障害者を理解するための学習や交流を行う授業や講義等を受けたり、課外活動を行ったりした経験があると答えた300名に対し、それはいつごろ経験したものであるか、複数回答可として聞いたところ、「幼稚園」1.7% (5名)、「小学校低学年」8.7% (26名)、「小学校中学年」13.7% (41名)、「小学校高学年」29.7% (89名)、「中学校」38.7% (116名)、「高校」28.7% (86名)、「大学」56.0% (168名)であった。幼稚園から小学校中学年までに経験した事がある者は17.7% (53名)であった。

学年別でみると、「中学校」は1・2年生が有意に多く ($p < 0.05$)、「大学」は3・4年生が有意に多かった ($p < 0.001$)。

学校別、性別、福祉への関心別、福祉教育を重要視しているかでみたが、有意差はなかった。

3) 福祉教育を始めるのに適する発達段階

福祉教育を始めるのに適する発達段階はどれくらいだと思うか聞いたところ、「幼稚園」10.0% (42名)、「小学校低学年」30.9% (130名)、「小学校中学年」23.8% (100名)、「小学校高学年」20.2% (85名)、「中学校」8.8% (37名)、「高校」

3.3% (14名),「大学・専門学校」0.5% (2名)で,「学校教育で行う必要はない」はなかった。『幼稚園から小学校中学年まで』64.6% (272名),『小学校高学年から大学・専門学校まで』32.8% (138名)であった。以下この2つに分けて比較した。

学校別・性別・学年別で有意差はなかった。

福祉への関心別にみると,『幼稚園から小学校中学年まで』は,『関心がある方』67.2% (217名)に対し,『関心のない方』55.1% (49名)と,『関心がある方』が有意に多かった ($p<0.05$)。

福祉教育を重要視しているかで見ると,『幼稚園から小学校中学年まで』は,福祉教育が重要と答えた者66.9% (263名)に対し,重要でないと答えた者33.3% (4名)と,重要と答えた者が有

意に多かった ($p<0.05$)。

4) どのような教科等で福祉教育ができるか

(1) 福祉教育ができると思う教科等 (表4)

具体的にどのような教科で福祉教育ができるか,複数回答可として聞いたところ,「道徳」が75.8% (319名)と最も多く,次いで「特別活動」60.1% (253名),「総合的な学習の時間」59.9% (252名),「社会」55.8% (235名)が5割以上であった。

学校別で見ると,教育大では,「総合的な学習の時間」($p<0.05$),「社会」($p<0.01$),「保健」($p<0.05$),「家庭」($p<0.001$),「体育」($p<0.01$),「図工・美術」($p<0.01$),「技術」($p<0.01$),「理科」($p<0.01$)が有意に多く,看護系学生が多い

表4 福祉教育ができると思う教科等

名 (%)

教科	全体 n=421	学校別			性別			学年別		
		教育大生 n=223	看護学生 n=198	検定	男 n=130	女 n=283	検定	1・2年生 n=238	3・4年生 n=183	検定
道徳	319 (75.8)	169 (75.8)	150 (75.8)	n. s	91 (70.0)	224 (79.2)	*	181 (76.1)	138 (75.4)	n. s
特別活動	253 (60.1)	141 (63.2)	112 (56.6)	n. s	82 (63.1)	168 (59.4)	n. s	146 (61.3)	107 (58.5)	n. s
総合的な学習の時間	252 (59.9)	145 (65.0)	107 (54.0)	*	73 (56.2)	175 (61.8)	n. s	135 (56.7)	117 (63.9)	n. s
社会	235 (55.8)	141 (63.2)	94 (47.5)	**	80 (61.5)	151 (53.4)	n. s	139 (58.4)	96 (52.5)	n. s
保健	195 (46.3)	114 (51.1)	81 (40.9)	*	64 (49.2)	127 (44.9)	n. s	111 (46.6)	84 (45.9)	n. s
生活	191 (45.4)	102 (45.7)	89 (44.9)	n. s	53 (40.8)	136 (48.1)	n. s	110 (46.2)	81 (44.3)	n. s
家庭	146 (34.7)	113 (50.7)	33 (16.7)	***	67 (51.5)	76 (26.9)	***	85 (35.7)	61 (33.3)	n. s
国語	132 (31.4)	76 (34.1)	56 (28.3)	n. s	42 (32.3)	87 (30.7)	n. s	73 (30.7)	59 (32.2)	n. s
体育	68 (16.2)	46 (20.6)	22 (11.1)	**	28 (21.5)	38 (13.4)	*	36 (15.1)	32 (17.5)	n. s
図工・美術	34 (8.1)	27 (12.1)	7 (3.5)	**	17 (13.1)	17 (6.0)	*	15 (6.3)	19 (10.4)	n. s
音楽	34 (8.1)	21 (9.4)	13 (6.6)	n. s	12 (9.2)	21 (7.4)	n. s	16 (6.7)	18 (9.8)	n. s
技術	29 (6.9)	23 (10.3)	6 (3.0)	**	17 (13.1)	11 (3.9)	***	7 (2.9)	22 (12.0)	***
英語	23 (5.5)	16 (7.2)	7 (3.5)	n. s	11 (8.5)	12 (4.2)	n. s	12 (5.0)	11 (6.0)	n. s
理科	17 (4.0)	15 (6.7)	2 (1.0)	**	12 (9.2)	4 (1.4)	***	4 (1.7)	13 (7.1)	*
外国語活動	15 (3.6)	11 (4.9)	4 (2.0)	n. s	6 (4.6)	8 (2.8)	n. s	6 (2.5)	9 (4.9)	n. s
算数・数学	9 (2.1)	8 (3.6)	1 (0.5)	n. s	6 (4.6)	3 (1.1)	n. s	4 (1.7)	5 (2.7)	n. s
その他	2 (0.5)	0	2 (1.0)	n. s	0	2 (0.7)	n. s	1 (0.4)	1 (0.5)	n. s

(χ^2 検定 *** $p<0.001$, ** $p<0.01$, * $p<0.05$, n. s非有意)

ものはなかった。

性別でみると、女子では、「道徳」($p < 0.05$)が有意に多かった。男子では、「家庭」($p < 0.001$), 「体育」($p < 0.05$), 「図工・美術」($p < 0.05$), 「技術」($p < 0.001$), 「理科」($p < 0.001$)が有意に多かった。教育大生のみでみると、「技術」($p < 0.05$), 「理科」($p < 0.05$)が有意に多かった。

学年別でみると、3・4年生では、「体育」($p < 0.001$), 「技術」($p < 0.001$), 「理科」($p < 0.05$)が男子で有意に多かった。

教育大生について、免許種との関係をみると、専門とする自分の教科で福祉教育が出来るとする者が有意に多かったのは、国語で「国語」($p < 0.05$), 社会科で「社会」($p < 0.001$), 理科で「理科」($p < 0.01$), 家庭で「家庭」($p < 0.05$), 技術で「技術」($p < 0.001$), 美術で「図工・美術」($p < 0.001$), 体育で「体育」($p < 0.001$)であった。

一方、福祉への関心別、福祉教育を重要視しているかで見ても、有意差はなかった。

(2) 特に重要だと思う教科等

特に重要だと思う教科等を1つ挙げてもらったところ、「道徳」が28.7% (121名)と最も多く、次いで「総合的な学習の時間」10.9% (46名), 「特別活動」9.5% (40名), 「社会」7.6% (32名)「保健」4.0% (17名), 「家庭」2.4% (10名), 「国語」2.1% (9名), 「生活」1.9% (8名), 「図工・美術」1.0% (4名), 「音楽」0.2% (1名), 「体育」0.2% (1名)で、「算数・数学」「理科」「英語」「技術」「外国語活動」「その他」はなかった。

性別でみると、女子では、「道徳」($p < 0.05$)が有意に多かったが、教育大生のみでみると有意差はなかった。

一方、学校別、学年別、福祉への関心別、福祉教育を重要視している者とそうでない者と比較したところ、いずれの項目においても有意差はなかった。

IV. 考 察

1. 福祉への関心・福祉教育の重要性について

福祉問題への関心について、「大いにある」が14.3%, 「少しある」が62.5%と関心がある者は多かった。しかし、昭和52年に野々山⁴⁾が桃山学院大学の学生（経済学部80名, 経営学部53名, 社会学部85名）を対象に行なった「障害者福祉についての意識調査」においても、関心が「ある」26.1%, 「少しはある」59.7%と答えていた。この調査は関心が「ある」「少しはある」「ない」の三択で行われているため直接の比較はできないが、約40年前の調査と比較して関心が高くなっているとは言えない。本調査が一般の学生より関心が高いと思われる教育系・医療系の学生であり、近年、少子高齢化、障害者福祉など福祉に関する事が社会問題となっていることを考えると、これからの社会を担う大学生として、もっと関心を持つことが望まれる。

また、女子で福祉問題に『関心のある方』と答えた者は82.0%に対し、男子では66.2%と、女子の方が関心は高く、教育大生のみでも女子の方が関心は高かった。これは、他の調査⁵⁾⁶⁾でも指摘されているが、高齢者・障害者に対しては、女子の方が関心や援助意欲が高いためと考えられる。

教育の重要性については、「重要だと思う」と答えた者は93.3%であり、関心の有無別でも有意差は無く、『関心のない方』と答えた者でも、福祉に関する教育を行うことは必要だと考えていた。

2. 福祉・障害に関する語句の理解について

1) 福祉に関する語句について

「バリアフリー」を「説明できる」とした者は73.2%, 「ユニバーサルデザイン」を「説明できる」とした者は67.0%と、比較的高かった。2008年に亀谷ら⁷⁾が行なった「建築を学ぶ大学生の高齢者・障害者等の福祉に関する意識調査」においても、「バリアフリー」約3.5ポイント, 「ユニバーサルデザイン」約3.2ポイントであった。この調査は最低点を0点, 最高点を4点として5段階で

理解度を数値化しており、直接比較はできないが、今回の調査と同様に両者で高い点数を示しており、大学生における理解度の高い語句であった。

「ノーマライゼーション」は、「説明できる」が全体で28.3%と低めであった。亀谷ら⁷⁾の調査においても約2.1ポイントと、やや低めの数値を示しており、大学生における理解度はあまり高くなかった。また、「説明できる」が1・2年生で23.9%、3・4年生で33.9%と、3・4年生の方が有意に多く、講義をはじめ、大学生活を送っている中でこの語句の意味を理解していた。

「インクルーシブ教育」という語句については、「説明できる」は教育大生で22.0%、看護系学生で2.5%と、教育大生の方が説明できる者が多かった。これは、教育に関する語句で、教育大学の講義で取り扱われていることが大きく影響していると考えられる。また、学年別にみると、「説明できる」は学年別で有意差はなかったが、学年が進むと増加傾向があり、大学の講義で学んでいる事が推察された。

「ジェンダー」は、「説明できる」は教育大生で64.1%、看護系学生で33.8%と、教育大生の方が有意に多かった。これも「インクルーシブ教育」と同様に教育大学で開講されている講義の中で扱われていることが理由として考えられる。学年別で有意差がなかったのは、対象とした教育大学では、1年生の必修科目の中でジェンダーについて学ぶことになっているためと考えられる。

2) 障害に関する語句の理解について

今回取り上げた9つの障害に関する語句では、「視覚障害」と「聴覚障害」が5割以上の者が「説明できる」としていたが、その他は全て5割以下であり、「ダウン症」「自閉症」「特別支援教育」は30%台であった。これらは、2011年に東京学芸大学の学生（主に1年生）を対象に行われた講義の最初の調査⁸⁾と比較すると、全ての項目で、今回の調査の方が、「説明できる」としている者が多かった。これは、教育大生、看護系学生ともに、大学に入ってから、これらに関する講義があり、

実習等で経験する事から、理解している者が多かったと思われる。

学校による違いをみると、「ダウン症」「発達障害」「精神障害」は看護系学生の方が「説明できる」としている者が有意に多かった。これは、看護系学生は大学内外の活動で医療について触れる機会が多く、教育大生に比べて、これらのことについて学ぶ機会が多いためだと考えられる。「特別支援教育」は、教育大生の方が有意に多かったが、これは、教育に関わる語句であることと、対象とした教育大学では、2年生で特別支援教育に関する科目が必修となっているためと考えられる。

性別による違いをみると、全体では、有意差があるものが多かったが、教育大生のみで有意差がないものは、看護系学生は女子学生がほとんどであることによる学校による違いと考えられる。教育大生のみでも有意差があったのは、「視覚障害」「聴覚障害」「知的障害」であり、いずれも女子の方が有意に多かった。

学年別による違いをみると、「ダウン症」と「特別支援教育」は有意差がなかったが、他の語句は、全て3・4年生の方が有意に多かった。また、「ダウン症」と「特別支援教育」も有意差はなかったが、3・4年生の方が多かった。これは、学年を経るごとに様々な講義を受講し、教育実習や臨床実習などで、それぞれの障害についての知識を身につけているためと考えられる。

また、2011年に東京学芸大学の学生（主に1年生）を対象に行われた講義の最後に行った調査⁹⁾と教育大生の結果と比較した。この調査は、東京学芸大学の教職に関する科目のうち「幼児・児童および生徒の心身の発達および学習の過程（障害のある幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程を含む）」に該当する必修の科目として開設されている科目を受講している学生を対象に、講義の最後に、語句の理解を本調査と同様に聞いているものである。本調査の対象とした教育大学でも、同様の科目が1年生で必修科目として開設されている。本調査結果で「説明できる」とした者は、東京学芸大学の調査⁹⁾とほぼ同様か、多かつ

た。これは、本調査の対象が1～4年生であり、2年生以上の大学での講義・実習で学んだ事によるものと思われる。

3) 障害に関する語句を知った経緯

ここで聞いたすべての語句において、「学校の授業」と答えた者が最も多かった。同じように教師を志望している大学1年生に、障害に関する語句を知った経緯を聞いた調査⁸⁾では、「テレビ」が最も多かったが、割合としては、大きな違いはなかった。それに対し、「学校の授業」は今回の調査の方が多く、これは対象が1～4年生であることと、どちらの学校においても障害について学ぶ機会が多いことが理由として考えられる。一方で「絵本」「まんが」はいずれにおいても少なく、障害を題材にした絵本・まんが作品の存在を知らないということも考えられる。また、自発的な意思を持って手を伸ばさないと触れる機会の少ない資料のためと考えられる。

学校による違いをみると、教育大生の方が有意に多いものとして、「特別支援教育」で「学校の授業」があり、看護系学生が多いものとして、「ダウン症」と「精神障害」で「学校の授業」があった。「特別支援教育」は、教育に関わる事が多く、「学校の授業」で取り上げているものと考えられる。また、「ダウン症」と「精神障害」は、看護教育では、精神疾患や問題を抱える対象者理解として必修で学ぶ内容のため、「学校の授業」が多かったものと考えられる。

性別による違いは、語句の理解と同様に、教育大生のみで有意差がないものは、看護系学生は女子学生がほとんどであることによる学校による違いと考えられる。教育大生のみで、女子が有意に多いものとして、「ダウン症」と「自閉症」以外の7つの語句で「学校の授業」があげられている。これは、同じ授業を受けている事を前提に考えると、女子学生の方が真面目に取り組んでいる事が考えられる。また、「ダウン症」と「自閉症」で「テレビ」が、「自閉症」で「まんが」が女子の方が有意に多かった。これは、女子の方が「テレビ」

や「まんが」により興味を持っている事と、これらを取り上げた「テレビ」や「まんが」が女性向きであった事が考えられる。

学年別による違いをみると、3・4年生が有意に多いものとして、「学校の授業」が全ての語句で多かったが、教育大生・看護系学生ともに、これらの内容については、学校での教育に取り入れられていることから当然の結果である。また、「課外活動」が「肢体不自由」「聴覚障害」「特別支援教育」で3・4年生が有意に多かった。これは、学年があがるにつれてボランティア活動等「課外活動」として、接する機会が増え、知識を得たと考えられる。1・2年生が有意に多いものとして、「テレビ」が多くの語句であげられていたが、これは、どちらの学校も3・4年生になると、教育実習・臨床実習・採用試験・卒業論文の作成などで学業が忙しくなり、テレビを見る時間が少なくなっている事が考えられる。

福祉の関心別にみると、『関心のある方』が有意に多いものとして、「ダウン症」「自閉症」「特別支援教育」で「テレビ」が、福祉教育を重要とするの方が有意に多いものとして、「自閉症」「肢体不自由」で同様に「テレビ」があげられていた。これは福祉に関心があり、重要視しているからこそ、これらの番組に興味を持って選択して視聴していると考えられる。

3. 福祉に関する教育について

1) 学校での授業や講義等

障害者を理解するための授業・講義を受けたり、課外活動を行ったりしたことがあると答えた者は71.3%であった。1・2年生では67.2%、3・4年生では76.5%と、3・4年生の方が多かった。これは、大学在学期間中にも障害者理解教育を受ける機会があり、上位学年の方が多くなっているものと考えられる。また、先述の和泉ら⁹⁾の調査では、51.9%が「ある」と回答していた。この調査の主な対象が1年生だったことを踏まえても、やはり教育系・看護系の学生は学年が上がるにつれてそのような機会が増えているのだと考えられ

る。

また、『関心のある方』では74.9%、『関心のない方』では62.9%と、『関心のある方』が授業や講義等を受けた者が多く、関心を持っている者の方が障害者理解に関する授業や講義にも意欲的に参加することや、課外活動に積極的に参加することが多いことが考えられる。また、福祉教育を受けた事で関心が高まっている事も考えられる。

また、その授業・講義を受けたり、課外活動を行ったことがあるとした者にいつ経験したか尋ねたところ、56.0%が「大学」で経験したとした。これを学年別に見たところ、1・2年生よりも3・4年生が明らかに多かった。これは大学生活を送る中でこれらの経験をすることが増えていくものと考えられる。

2) 福祉教育を始めるのに適する発達段階

福祉教育をはじめるとに適する発達段階はどれくらいか聞いたところ、「小学校低学年」が30.9%で最も多かった。また、性別などの隔たりもなく遊ぶ幼稚園から小学校中学年までと、ギャングエイジが始まる小学校高学年から大学専門学校までで発達段階を分けて見たところ、『幼稚園から小学校中学年まで』が64.6%、『小学校高学年から大学・専門学校まで』が32.8%と、前者の方が多かった。これは、子どもたちが小さいグループを作りだすギャングエイジを迎えるよりも前に、ノーマライゼーションの考え方を子どもたちに伝えておきたいといった考えや、社会問題化しているこの問題について、早い段階から触れさせるべきと考えている者が多かった。

これをさらに関心別、福祉教育を重要視しているかどうかで比較すると、『幼稚園から小学校低学年まで』と答えた者は、それぞれ『関心のある方』、「重要だと思う」で多かった。このことは、福祉に関心のある者、福祉教育が重要だと思う者が早期からの福祉教育を望んでいた。

3) どのような教科等で福祉教育ができるか

福祉教育ができそうな教科等として、「道徳」

75.8%、「特別活動」60.1%、「総合的な学習の時間」59.9%が多く、教科書のある教科に比べ、授業の中に組み込みやすいという考えからきているものと思われる。また、それに続いて「社会」「生活」などが挙げられていることから、資料を読み取る活動や学校の外での見学などで実際に体験する活動を重視したらよいという考えも読み取れる。

これを学校別に違いをみると、「総合的な学習の時間」「社会」「保健」「家庭」「体育」「図工・美術」「技術」「理科」で教育大生が多かった。また、自分が専門とする教科で、福祉教育が出来るとする者が有意に多かった。これは、教育大生は大学の講義において各教科の目標などを学び、その教科等を通してどのようなことができるか考えることが多いためと考えられる。

性別による違いをみると、教育大生のみで有意差がないものは、看護系学生は女子学生がほとんどであることによる学校による違いと考えられる。教育大生のみでは、「技術」「理科」において男子が多かった。

同様に学年別にみると、「体育」「技術」「理科」において3・4年生が多かった。これは、学年が上がることによってその教科で学ぶべき内容を把握する者が増えることが理由としてあげられる。

V. まとめ

教育大生223名と看護系学生198名の合計421名を対象に、福祉に関する理解と教育について調査したところ、次のような結果を得た。

- 1) 福祉問題への関心について、「大いにある」が14.3%、「少しある」が62.5%であり、福祉問題に関心を持っている者は多かったが、関心が高くなっているとは言えない。
- 2) 福祉教育の重要性については、「重要だと思う」は93.3%であった。これは、福祉教育に『関心のない方』でも91.0%が「重要だと思う」と答えており、福祉教育の重要性はほとんどの者が認めている。
- 3) 福祉に関する語句で、「説明できる」は、「バ

リアフリー」73.2%、「ユニバーサルデザイン」67.0%と多く、学生の理解度は高かった。

- 4) 障害に関する語句では、「説明できる」は、「視覚障害」「聴覚障害」が5割以上であったが、「ダウン症」「自閉症」「特別支援教育」は30%台と低かった。
- 5) 障害に関する語句の理解度を学校別にみると、ほとんどの語句で看護系学生の方「説明できる」とする者が多く、教育大生の方が有意に多かったのは「特別支援教育」であった。これは、看護系学生は医療について学ぶ機会が多く、教育大生は特別支援教育を科目として学んでいるためと考えられる。
- 6) 障害者を理解するための教育を受けたことがある者は71.3%と、多くの者が受けていた。また、福祉に『関心のある方』が受けている者が多く、授業や講義、課外活動に積極的に参加する事が多い事が考えられる。
- 7) 福祉教育を始めるのに適する発達段階はどれくらいだと思いか聞いたところ、性別などの隔たりなく遊ぶ『幼稚園から小学校中学年まで』が64.6%と多く、ノーマライゼーションの精神を育てていくためには早い段階から指導していくことが必要と考えられている。
- 8) どのような教科等で福祉教育が行えるかについては、「道徳」75.8%、「特別活動」60.1%、「総合的な学習の時間」59.9%が多く、教科書のある教科に比べ授業の中に組み込みやすいことが理由として考えられる。

本調査では、教育大生・看護系学生ともに福祉への関心は高いが、より高い関心を持つことが望まれる。教育大生よりも看護系学生の方が障害に関する語句の理解度が高かったが、これは日頃受ける講義等の内容の違いが影響していると考えられる。教育大生でも、今回取り上げた福祉や障害に関する事については、説明できるようになる事が望まれる。

また、知識を得るのは「学校の授業」が多いので、種々の教科で福祉に関する教育を行うとともに、

学校内だけでなく、様々な機会を積極的に作る事が望まれる。福祉に関する事を知ろうとするきっかけを教育現場で設けていくことが求められる。

福祉への配慮行動との関連は次報で報告する。

文 献

- 1) 総務省統計局：人口推計，2014
- 2) 佐藤暁：発達障害のある子の困り感に寄り添う支援 通常学級に学ぶLD・ADHD・アスペの子どもへの手立て，学研，2004
- 3) 佐々木まりあ，有元典文：「困り感」のある学習環境における授業デザインの可能性－アシスタントティーチャーを活用した授業実践の分析から，横浜国立大学教育学会論集 1：33-45，2014
- 4) 野々山久也：障害者福祉についての意識調査，桃山学院大学社会学論集，13：401-414，1980
- 5) 加藤聖子：高校生の福祉意識，藤女子大学QOL研究所紀要，2：55-63，2007
- 6) 安妍・芝木美沙子：大学生の高齢者に対する意識調査－日中の違いについて－，北海道教育大学紀要，65：465-481，2014
- 7) 亀山義浩，岸上純子，知花弘吉：建築を学ぶ大学生の高齢者・障害者等の福祉に関する意識調査，日本建築学会計画系論文集，73：2613-2621，2008
- 8) 田口禎子，林安紀子，橋本創一他：通常教育教員養成における特別支援教育プログラム構築のための基礎的な検討，東京学芸大学紀要 総合教育科学系Ⅱ，63：303-319，2012
- 9) 和泉綾子，田口禎子，三浦巧也，ほか：通常教育教員養成における特別支援教育プログラム構築のための基礎的な検討(2)，東京学芸大学紀要 総合教育科学系Ⅱ，64：235-243，2013

(芝木美沙子 旭川校教授)

(石井 柚季 旭川校大学生)

(原谷 珠美 日本医療大学准教授)